
雨傘

アタル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨傘

【Nコード】

N6537F

【作者名】

アタル

【あらすじ】

雨の日に一緒に帰った思い出。君と僕の、最後の日。

雨の日が好きだった。

君と一つの傘を分け合い、肩を並べて歩けたから。

わざと忘れたり、失くしたり。そんな僕の努力を、おそらく君は気付いていたんだろうね。

君はいつも優しく笑って、僕を迎えてくれる。

降り続く雨の音は、まるで僕等を祝福しているようで、永遠に止まないでいて欲しいとさえ願ってしまう。

でも、そんな時間は長く続きはしないだろうと、僕はどこかで感じていたんだ。いつまでも続くはずがないんだって。

いつしか、曇った空の隙間から差し込んだ淡い日の光が僕等を包み、アスファルトの上には沢山の鏡が出来ていた。

草花に乗った水滴が結晶のように煌めき、澄んだ風が僕等の間を吹き抜ける。

君は楽しそうに水溜まりの側へと踊り出し、溢れ出す笑顔は冷えた身体も温めてくれた。

開いたままの純白の傘は、まるでウエディングドレスのようで、僕の瞳には君が眩しく映っていた。

その日の夜、不意に取った電話の内容を僕はあまり覚えていない。ただ、何を言いたいのかは伝わった。信じることなんて、出来はしなかったけど。

だから、あの時の傘が真紅に染まって僕の前が届いた時、初めて実感が湧いたんだ。

僕に残されたのは、あの日の思い出と、あの時の傘。

今でも雨が降ると、あの日の君が浮かんでくる。

そして僕は今日も傘を持たずに立ち尽くす。

雨の日に君と帰るのが当たり前前に思ってた傘を忘れる僕を、いれてくれる君はもういないのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6537f/>

雨傘

2011年1月26日23時39分発行